

【取扱い厳重注意】

○細野大臣

[Redacted]

○岡秘書官

○細野大臣

○岡秘書官

[Redacted]

○細野大臣 これは毎日やったんですよね。

○岡秘書官 ほぼもう毎日ですね。

○細野大臣 私と、武黒さんにしたのか、あのときは。

○岡秘書官 そうです。東電側の総括が武黒さんですね。

○細野大臣 それで、政府側も担当者を決めました。

○岡秘書官 みんなが、保安院だとかの人間がそれぞれ張り付いて、政府と事業者とがワンセットでワンテーマずつやっていった。

○細野大臣 そうです。間違いありません。

○岡秘書官 ただ、後ほどちょっと、例えばRHRの代替をあきらめるとかいろいろなことがあって、それを現状に近い形に再編して。

○細野大臣 再編して、大体終わっているという。

○質問者 発足して27日の4日後になるのでしょうか、4月1日に6チームに再編成をされているのですけれども、これは何か具体的なきっかけがあったということでしょうか。

○細野大臣 このときは、結構私が全部やっていたので。

○岡秘書官 統合本部の体制をもうちょっときっちり整理しましょうということで、まず幹部から清水さんを外したんですよね、たしか。こちらは菅さん、海江田さんを残して、

【取扱い厳重注意】

東電の方は、清水さんを飛ばして、勝俣さんを持ってきて、当時細野さんは明確な位置付けがなかったので、事務局長という形ですね。

○細野大臣 このときに正確に位置付けたのか。

○岡秘書官 ふわっとした本部というものだけがあったので、中身を整えたのです。

○細野大臣 私は、この頃まで東電本店2階のオペレーションルームに席がなくて後ろの方に座っていたんですよ。海江田さんは席があったんですけども。それで、その頃こういう位置付けになってから席ができたんです。

○岡秘書官 そうですね。また、特プロジェクトのリーダーとして西澤常務と並んで任命されました。

○細野大臣 それで、このときに、これは間もなく出ますから今日は御説明しようと思っていたんですけども、今日はちょっと資料をお持ちしていないのんですけども、

これが25日に出ているレポートなのですけども、これは情報公開請求が出ているので来週くらいに出るんですけども、これだけは私はもう握り潰したんです。ほかの情報は全部もう会見をしてから全部、本当に全部出したのんですけども。こういう4号機のプールがそれぞれ空になったときにどういう影響があるかというものです。ちょっとなかなかしっかき見ないと分からないのんですけども、例えば、4号機が全部いった場合に、屋内退避10ミリシーベルトは70キロになると。70キロと言うと東京は入るんですよ。

○質問者 これは大変な話ですね。

○細野大臣 全部空になったらですよ。その代り、別にいきなりなるわけではなくて、ずっと空になるまでに、事象発生から大体1か月近くかかってこうなると。だから、十分避難はできると。ただし、これでいかに4号機のプールが深刻かということになったんです。

日本側は、当時へりを見て、それで水があると。みんなでこの映像を凝視して、この光っているのは水だと。それで拍手が出たんです。あれはいつ頃でしたか。多分23とか。

○岡秘書官 先ほどのSPEEDIがどうか言っていたときと同じ頃では。

○細野大臣 その頃なのですけども、これは検証しなければいけないということで検証したんです。それで検証したときに、やはり4号機のプールを本当に補強しなければならぬと言うので、総理に言って、馬淵さんに補佐官になってもらったんです。馬淵さんは4号機のプールの補修とか、建屋の健全性とか、元々建設屋さんなのでそれをミッションとしてやってきて、それでそれに合わせて幾つか再編して。

○岡秘書官 燃料取り出しとか、かなり先のテーマが特別プロジェクトとして当時掲げられていたのは、米側の懸念が反映された形ではありましたよね。

○細野大臣 あと、リモートコントロールというのも、4号機のプールが、もしくは何か

【取扱い嚴重注意】

エスカレーターした場合に4号機のプールに水を入れ続けられるように、「キリン」の無人化とかをしたんです。燃料を入れる無人化、水を入れる無人化、あとは井戸も無人化して、上から水を入れられるように。これをやるためには近藤先生と私とで無人化でやるしかない。万が一、例えば爆発して誰もいなくなっても4号機のプールだけには水が入るとかですね。それと4号機のプールの支柱を作って建屋を守って、絶対そうならないようにするとか、やらなければならないというので、そういう問題意識で再編したんです。馬淵さんに幾つかのプロジェクトを仕切ってもらったんです。

○質問者 近藤先生というのは、どういう方ですか。

○細野大臣 原子力委員長です。

○質問者 これはちょっとまた、小佐古参与との関係で、近藤委員長の話を。

○細野大臣 小佐古さんは、またちょっと違うんですね。こちらは直接関与していないので。

これは私が分割発注して、近藤さんが作って、総理にだけ見せたんです。馬淵さんには見せました。これを見ないと馬淵さんは仕事できなかったのだから多分、秘書官も含めて本当に見ていないと思います、これは。

○質問者 アメリカからはいつ頃懸念が伝えられて、この資料がいつ頃作られてということ。

○細野大臣 これは25日ですね。ですから、
これは本気で検討しなければいけないということ、特命で近藤委員長にお願いしたんです。

菅総理が辞めてから、こういうシミュレーションがあったと発言したので、私は、菅総理がしゃべらなければこれはもう全部葬り去ろうと思っていたのですけれども、それちょっと出るということになって、請求対象になって、それでも来週くらいに公開するのですけれども。

○質問者 その特別プロジェクトチームと日米協議の関係と申しましようか、そのプロジェクトチームにアメリカ側の人間が入るというわけではないと。

○細野大臣 直接は入れませんでした。そこは、外側からの見え方もあったし、皆さん大げさに聞こえるかもしれませんが、見え方によっては半分進駐軍みたいに見えたと思うんですよ。やはり日本が自力で絶対乗り越えなければいけない事態だと思っていたので、最大限の援助は欲しかったし、実際いっぱい物もくれたんですよ。バージ船とかですね。もうあらゆる技術面、あらゆる支援を彼らは惜しまなかったから、そういう意味では非常にありがたかったのですけれども、全部一緒にやって、下手すれば向こうの方が技術力がある、向こうが仕切るとい形にすると、本当に乗り越えられないと思ったので分けたんです。彼らは常に来ていて、それぞれのプロジェクトに関与していたか、もしくは日本側がいつでも相談できるような体制にしていたので、部屋を持っていましたよね。

○岡秘書官 持っていないです。ただ、NRCはちょっと分かりませんが、分科会に

【取扱い厳重注意】

それぞれ参加をいただいて、それは政府機関だけではなくて、外国の研究者とか。

○細野大臣 それぞれのところで行っていたんですね。分科会の方には出ていたんですね。

○岡秘書官 ええ。

○細野大臣 分科会は、それぞれ違うところで行っていて、そこにはNRCは1人、2人ずつ代表者を出していましたね。

○岡秘書官 出たり、出なかったりですけども、出るものあれば出ないものも。

特プロというのはあくまでも、発足当時はちょっと足の長い、ちょっと先を見たプロジェクトを集めましょうと整理され、日々の冷却とか「キリン」がどうだとか、そういう話は2階のオペレーションルームでやりましょうと整理されました。その両者で出てきた課題で、外国に協力してもらいやすいものについては、とりあえず米側に持っていきましようと言って、毎日夜の会議で進捗状況を報告すると同時にリクエストをして。

○細野大臣 それで、例えばアイロボットとかタロンとか、そういうロボットを持ってきてもらったりですね。

○岡秘書官 ちょっと消してもらえますか。

<録音停止 01:34:34>

○質問者 こういった特別プロジェクトチームを立ち上げるに当たって、例えば総理だったり官房長官には事前に相談をすとか報告をすといったことは。

○細野大臣 総理にはこの特プロの話も米国の話もしていました。全部決裁を取ってやっていたけれども、当時の菅総理の判断は、とにかくおまえがいいと思うことをやれと。それがだめなら決裁を出すからという雰囲気だったんですね。

ですから、私も、原災法上総理が指示権を持っているので、総理が決めるべきことは何かと考えながらやっていたんです。東電もそのことは分かっていて、私がこういうふうに行うと言ったら、基本的にはそれに従ってはくれました。できるだけ独善にならないようにはしましたけれどもね。事前にちょっと聞いて、こういうのはどうだろうか。意外と東電の部長クラスとかその下のクラスというのは、会長に物を言えなかったりする部分もあるので、全部が全部いいようになったとは思いませんけれども、やってよかったのではないかとは思っているんですけどもね。責任者も明確になったし、政府と東電との協力関係というのは、この特プロを通じてできるようになったので。

○岡秘書官 これがなかったら無秩序にやっていたところをきれいに論点が整理されて。

○細野大臣 これを作って積み上げの議論をして、ロードマップを作ったんです。

○質問者 プロジェクトチームと離れて、統合本部での先ほどおっしゃったルーティンの業務の意思決定というのは、全体会合というものと、官邸の方々が詰めておられた小部屋というものがあつたように聞いているのですけれども、どういったところでどういう意思決定がされてというのは。

○細野大臣 実際のいろんな判断は、当時は武黒さんかな。武黒さんと武藤さん。

○岡秘書官 大体、毎日のオペレーションが終わるとば一つと情報が集まってきましたよね。

【取扱い厳重注意】

夕方あたりに、柳瀬、その当時総務課長と武黒さんの下に、まあ安井さんもそうですけれども、みんなが情報を入れて、では次の日はここに「キリン」を置いてとか、「キリン」を輸入してどうかということを決めては、これでいきましょうと海江田大臣や細野大臣に伺って、次のオペレーションを決めていくと。

○細野大臣 実際、安井さんがかなり決めていましたね。安井さんのことは私は信用していたので、技術的なことも疑問があったら彼が非常にシンプルに話してくれたので、安井さんがこれをやりたい、東電はなかなかやれないというときは、安井さんに私はどちらかという軍配を上げていたので、私が具体的に何をやるかと分かるわけではないので、そうやって決めていました。

私がやっていたことは、東電がやりたいのだけれどもできないことというのはいっぱいあるんですね。例えば「キリン」を輸入してくると、通関をするとか、道路の通行許可を出すとか、パトカーで先導するとか、自衛隊に出動を頼むとか、物がないうちにアメリカに調達をお願いするとか、それは全部私がやっていました。総理もそこはもう本当に全部任せてくれたので、3月のこの時期はほぼ何でも、思ったようにやると言ったらちよっと横柄に聞こえるかもしれませんが、その場で判断しなければならなかったもので、海江田大臣には必ず決裁を取って、総理にも確認をして、それで各部局に実質的な総理の指示を伝えるという役をやっていました。

○質問者 そうしますと、集まってきた情報を基にプラント対応が決められ、東電ができないことについても、落とすと言うとあれですけども、各行政機関に対して求めていくということをされていたと。

○細野大臣 そうです。

○岡秘書官 その並びでアメリカとも。

○質問者 アメリカとの調整もやられていたと。

○岡秘書官 はい。

それで、ちょっと足の長いものは特プロでやると。ただ、いつの間にか特プロの方にも日々のルーティンのものが集まってきたので、その切り分けは分かりにくいです。

○質問者 分かりました。

先ほどちょっと出た話なのでですけども、4月の下旬、25日から統合本部の記者会見を開始されているのですけれども、3月15日に統合本部自体が立ち上がって、このタイミングで統合記者会見を開始されるに至った経緯というのは。

○細野大臣 これは、ちょっと遡ると、3月の20日前後に枝野長官から、自分も本当に体力的にもきつくなってきたから、発電所の方の記者会見をやってくれないかと頼まれたんですよね。もうちょっと前だったかもしれません。そのときは私はこちらで手いっぱいだったので、とても無理だと言って断ったのですけれども、そのうちやはりすごくいろんな人から言われるようになったのは、官房長官が会見していて、保安院が会見していて、当時文部科学省が会見を始めて、東電が本店と現地で見会っていて、それぞればらばらの

【取扱い厳重注意】

で、何とか統一化しないと世界からもいろんなことを言われると。誰が顔なのか分からないというふうに言われたんです。

それで、3月の終わりから4月の頭にかけて、これはちょっと何とかしなくてはいけないと思って、4月の頭頃だと思うのですけれども、会見を統一化しようとしたんですよ。官房長官から言われたこともあったので、官房長官の会見はそういう技術的なことは余り言わずに大まかな政府の方針を話す。現状認識。私のところで東電と保安院と文科省とを統合して、会見をしてそこで全てをやると。ワンボイスで。それぞれ立場は違ってもいいけれどもやるべきだと思ってしかけたんですけれども、できなかったんですよ。

それは、一つは、監督する側と監督される側と一緒に集まって会見するというのは余りいいことではないという筋論。保安院と東電はそういう関係じゃないですか。談合しているみたいに見られるのはよくないということが言われたんですよ。

○質問者 それは、どちらの組織からもそういう意見が出てきたと。

○細野大臣 特に保安院です。

あとは、それぞれの記者クラブがありますから。経産クラブ、文科クラブ、東電付きの科学部とかですね。こちらにはフリーは入っているけれども、こちらには入っていないとか、クラブの流儀があるからそんなに簡単には統一できないと、内々に打診したらマスコミからも反発があった。当事者からも反発があって、マスコミからも反発があって、それで一回断念したんです。

ところが、それから汚染水の問題もあったし、あとは INES の評価の問題もあったし、SPEEDI の問題もあって、本当に政府の信頼がズタズタになってきたなという印象があったので、もう一回これはまずいと思って、今度はやらせてくれと言って、海江田大臣と総理に相談したらそれはやった方がいいということなので、もう強引にまとめて、俺がやるから会見は基本的にここでやってくれというので決めたんですよ。それで、25日から始めたんです。

初めに一番やりたかったのは、しっかりこれまで公開していなかったので情報を公開することだったので、25日に SPEEDI のデータを出せと言った。一回私は見ていたんですよ、単位放出量の値を。あれを出せと言ったら出てきたんですよ。これで全部だと言ったら、全部だと文部科学省が言ったのだけれども、実はありましたと言って30日頃に持ってきたから大分、一悶着あったんですけれども、2日にもう一回出しているはずですよ。SPEEDI の2回目を。

○質問者 はい。5月の2日に。

○細野大臣 そのときにちょっと私が失敗したのは、その来た文科省の担当者が、パニックになると思ったんですみたいなことを言ったので、それを私が思わず言ってしまったんです。私が思ったのではなくて、担当者がパニックになると。よかれと思って、そういう配慮もしないと隠していた理由にならないから、やはりこういう生煮えの情報になるとパニックになると思ったようです。私は、ただそれを見て公開するべきだと思ったので

【取扱い厳重注意】

今日公開しましたと言ったけれども、パニックで隠していたととられてしまったので、そこはすごく失敗したと思っています。

○質問者 分かりました。

SPEEDI の話をこのままちょっと聞かせていただきたいのですが、3月の末くらいに文科省に対して情報公開請求がありまして、SPEEDI のデータを公表してほしいという要求がございまして、それへの対応ということで細野当時補佐官と福山官房副長官と関係省庁が協議をしているようなのですけれども、そのあたりはどのような議論をされたかというのとは。

○細野大臣 それは私も後から文科省から聞いて、メモまで見せてもらったのですけれども、当時は何をやっていたかという、飯舘村を避難させるかどうかという議論をしていたんですよね。23日にやって、多分その次2回目に集められたのが30日か31日か。これは岡さん行っていないと思うけれども、この辺で2回目に集まって、そのときにその話が出たということを行っているようなのですけれども、そのときの主題は避難をさせるかどうかということだったんですよ。私、正直言うとこの23日にそういう判断がされたということにもそのときは違和感を持っていたし、また、本当に忙しい中で官邸の副長官室が何かに呼び出されて、延々と1時間くらいやったので、当時寝ていなかったからフラフラになりながら聞いていたのですけれども、記憶にないんですよね、その公開の話は。

公開すべきかどうかと聞かれば、私はオウム返しで必ず公開すべきだと言ってきた人間だから、その打ち合わせで私が何か非公開にすべきだということを合意したみたいな話があるのですけれども、そこはちょっと納得できないんですよね。仮に非公開にすべきだと言っているとすると、私はこの4月の25日のときに、これで全部だなと言わないでしょう。

○質問者 そうです。そこが、当時3種類どうも計算されたものがあつたようでして、単位量を仮定した計算とですね。

○細野大臣 それは見たんですよ。

○質問者 安全委員会が23日から出していた逆推定のもの、あとそれぞれが様々な仮定を置いて行っていた計算、これが5月2日に出ることになるのですけれども、そういった峻別して計算結果を認識されているという。

○細野大臣 それは、私、5月2日の前の5月1日か4月の30日に見せられたんです。何でこんなものを隠していたんだと言って文科省の担当者と大喧嘩したんですよ。大喧嘩と言うとちょっと大げさですけども。しかも、4月25日に全部出せと。これは何人も聞いていますから。これで全部ですと言いきったのに何で出てきたんだと言ったら、パニックを恐れたんだと言って、それを記者会見で言って失敗したと申し上げましたけれども、そういう記憶なので、3月30日にそういう話があつたということは、そのときに飯舘村の方を避難するかしないかで打ち合わせをした記憶はあるんですね。その最後にその話をしたとかしないとかいうことに関して、記憶がないんですよね。

【取扱い嚴重注意】

○質問者 もし幾つか御記憶ございましたらなのですが、恐らく4月の末の時点で文科省の担当者が、単位量放出を出せば全てであるというふうには彼らは認識はしていないはずなんです。それは、現に彼らは様々な仮定を置いて計算しておりますので。当時記者発表をされる前の段階で官房長官のところで、この SPEEDI データを公表するかしないかというような協議をされていたというふうに聞いておりまして、25日の記者会見の中でも補佐官の方から、官房長官の意向を受けて全て公表することになりました。

○細野大臣 それは、全部公開するというに関しては、事前に官房長官には許可を取っていますね。私がそれを言っているなら。

○質問者 それはいつ頃だったかというのは。

○細野大臣 違います。私が直接言ったのではなくて、官房長官からも全部公開されていると言われていましてと文部科学省の担当者が言ったんです。それは間違いないですね。

○質問者 分かりました。

○岡秘書官 当時、SPEEDI と言ったら避難、官房長官は一連のものとして意識されていたので、事務的にも当然了解を取るものという感覚がありましたね。

○細野大臣 そこは本当に誰かを責めたくないのであれなのですけれども、私は15日以降は官邸にいなかったで、その間でどういうやり取りがあったのかということとは分からないんですね。官邸に呼ばれて打ち合わせをしたのは、本当にその避難の打ち合わせのときに、発電所の状況とかモニタリングの情報はどうかということと呼ばれて行っていただけなので、その打ち合わせ以外のことは分からないんですね。だから、どういう経緯があったかはちょっと正直分かりません。

それは30日ですか。

○質問者 やり取り自体は25日の午前中だったというふうに。

○岡秘書官 3月ですか。

○質問者 いや、4月です。4月の25日です。

○細野大臣 いや、4月の25日は私が会見した日ですから。

○質問者 その前の協議は、3月30日と31日、2日に分かれて行われているようなのですけれども。

○質問者 具体的な時間は、夕方6時過ぎくらいから30日はあったと聞いています。

○細野大臣 その頃に何回か打ち合わせをして、その後私は飯館村に行っていますから。私のスピード感と当時官邸のスピード感は随分違うなと思ったんですよ。東電にいて、本当にその場で判断しなければならないから、ぱっと決めなければいけないという緊張感を持ってやっていたんですけれども、官邸に行くと延々と1時間単位で打ち合わせがあるんですね。何十人も集まって。会議に入る前に20分くらい待たされたりとかして、それで30分とか1時間とか打ち合わせをするから、気持ちとしてはもう勘弁してくれと。しかも決定権もないし、ああだこうだと、もう情報も大体出揃っているのに決まらないから。これはちょっと愚痴になってしまうのですけれども、そういう感じで官邸に呼び出されてい

【取扱い厳重注意】

ましたね、その間は。

○質問者 その単位放出については。

○細野大臣 単位放出は、3月23日にもう持っていたと思いますよ。3月23日に北西に出ているものと、プラス単位放出のものを持っていたんじゃないですかね。それで、単位放出のものを見たのはすごくよく覚えているんですよ。

それを見たら、単位放出のものは確かに天気予報みたいで、風がこちらを向いたらこちらに行って、こちらに向いたらこちらに行くと、余り意味はないなと思ったのは覚えています。

○質問者 23日のもので見られたときに、そのまま安全委員会の方で公表されているのですけれども、そこは補佐官の方で何か指示をされたとかというのは。

○細野大臣 公開すべきだと強く言いました。

○質問者 補佐官の方から。

○細野大臣 ええ。でも、これは枝野長官も公開すべきだと言っていましたね。似たようなものがいっぱいあったんですよ。本当に似たようなものが、どれを見ても同じだから、同じものを幾つも公開してもしょうがないので、一番分かりやすいのはどれかというので公開した。2、3枚あったはずなんですよ。コピーが違っただけなのか、シミュレーションが違ったのかよく分からないのですけれども。

○質問者 その後に24日に情報公開請求が来まして、各省どう対応をするかという協議で30日に官邸で話をされたそうなのですが、そのときに当時補佐官の方から、明日の天気予報みたいな形で、SPEEDIの拡散予報というものを毎日できないかというような御指示があったというふうに聞いているのですが、そういうやり取りをされた記憶は。

○細野大臣 毎日の風向きでありましたよね。それは見た覚えがありますし、その議論はしているのかもしれませんが。

○質問者 そこで公開するしないという話は、余りされた御記憶は。

○細野大臣 単位放出当たりのものは、たしか公開の議論はしたのですが、はっきり言って1時間ごとじゃないですか、あれは。3月の11日の1時間ごと、12日の1時間ごとで、そんなものを見ても正直分からないですよ。それで、公開してもしょうがないという話になったんですよ。公開すべきだというふうには常に思っていたと思うのですが、一方で、私はまだ会見していなかったので外向きには一切しゃべらない立場でしたから、余り強く、公開すべきだとか、これはこうすべきだというような意見は言っていなかったかもしれません。

○質問者 それで4月の25日に、官房長官も全て出すということでおっしゃられて、でも実はまだ出ていないものが幾つかあって、その後のやり取りに至るのですけれども、その当時、広瀬研吉参加が記者会見の直前に当時補佐官とこのSPEEDIの公表についてやり取りをされていたというふうに聞いているのですけれども、何かお話をされた御記憶はございますか。

【取扱い厳重注意】

○細野大臣 当時、広瀬さんが会見をやっていたんですよね。初めの数日間は、1週間くらい。5月の2週目くらいまでか。統合本部で。

○岡秘書官 少なくとも、会見は毎日のルーティンなんですけれども、4時半に会見が始まるんですけれども4時から必ず打ち合わせをするので、発表事項について何らかのやり取りが必ずあるんですよ。本件が印象的なやり取りだったかどうかというのは、私は分からないんですけれども。

○細野大臣 この日はもしかしたら1回目なので、少し早目に打ち合わせをしているかもしれません。そのときに、前の日か何か打ち合わせをしたのかな。

○岡秘書官 こうした形の会見を始める前はみんなで集まっては、こんな感じでやってくという打ち合わせを累次やりました。

○細野大臣 前の日にやっていたかもしれませんね。

○岡秘書官 中身は覚えていないのですが、第一回は何をやるかというのはかなり入念に積み上げていきました。

○細野大臣 ただ、多分前の日くらいには言うておかないと、そのときに SPEEDI の情報の整理ができていないはずなので。

でも、その日は紙で出さなくてネットで出すと発表したんです。ですから、準備はそんなにしていないとすれば、私は25日の会見の前の打ち合わせは、SPEEDIの情報を全部出せと。これで全部だなと念押しをしているはずですけどもね。

○質問者 文科省に。

○細野大臣 文科省、保安院、安全委員会の3者なんですよ。

○質問者 それで全てですという。

○細野大臣 全てですと言って。だから、その後出てきたので私は怒ったんです。

○質問者 その後、まだありますということで説明に事務方が来て、そのやり取りがあったときに、事務方からはどういった説明があったんですか。

○細野大臣 まだありましたと言って、30日か1日かどちらかにあって、文部科学省が持ってきたんですけれども、これは25日に言っていたじゃないかと。何でこんなものが今出てくるんだと言ったら、いやいやとかという話があって、それでパニックにならないようにみたいな話があったんですよね。

○質問者 分かりました。

○細野大臣 ちょっと切ってもらえますか。

<録音停止 01:55:37>

○質問者 もう少しお伺いできればと思うのですが。

○細野大臣 では11時半までにしましょうか。

○質問者 3月11日から文科省に働きかけをされていたということなのですが、その後3月16日に政府の中でモニタリングの役割分担というのが整理されまして、文科省が測る、安全委員会がそれを評価する、そして原災本部がそれに基づく対応策を作ると。この整理

【取扱い厳重注意】

がされた経緯について、補佐官の方で御存じでいらっしゃいますか。

○細野大臣 これは、枝野長官がしたんだと思います。そういうことになったというのは聞きました。

ただ、私は当時、枝野長官には、文科省のモニタリングはひどいと。全然やる気がないし、3月12か13あたりで測れと言ったのを3日間くらいほかしていたので、もう本当に憤って何とかしてくれというのは言った覚えがあるんですね。その日だったか前の日だったかは分かりませんが、責任体制をしっかりとってくれというのは言ってあったので、そういう現実に応じて枝野長官が采配してくれたんだと思います。それですっきりはしたんですよ。責任体制は。

SPEEDIもそのあたりで何か調整していませんか。SPEEDIの役割分担も。

○質問者 そうですね。同じ日に。

○細野大臣 そうですよ。その会議には私は出ていません。16日は、プールに水を入れられないで大もめしていた日なので。

○質問者 モニタリングの中で海城モニタリング、先ほど出た話なのですけれども、大臣の方から各省に対して働きかけがあったというふうに聞いておまして、海城モニタリングを強化するべきであるという問題意識については、補佐官の問題意識ということで各省に。

○細野大臣 そうですね。これは、4月の頭に海水の放出の話があって、それで世界からも国内からも批判が殺到したので、どれくらい漏れているかというのを調べなければいけないと思ったんです。

ところが、文部科学省は一切やる気がないと。水産庁に言ったら水産庁は、そんなところの魚は食べないので、食べない魚は測りませんと言ったんです。では海上保安庁に測ってくれと言ったら、海上保安庁には釣り竿がないと、船はあるけれども。まあ海上保安庁もほかにも忙しかったし。

後はどこだったか。

○岡秘書官 東電に。

○細野大臣 東電はちよろちよろ測っていたんですけども、それで一回4月の下旬に打ち合わせをして、その3者、水産庁と海保と保安院と、文科省と安全委員会くらいを呼んでやったんですけども、全員で押し付け合いをして、それで一回別れて、次の日もう一回やったんですよ。そうしたらまた同じ状態だったから、時々そうやらないと当時は動かなかったんで意識的にちょっと机ひっくり返して、とにかく何とかしろと。1時間持ち帰って考えてきてくれと言ったら、ちょっと考えてきて、それで測れることになったんですよ。

それで、水産庁も試験的に測ると。水産庁が漁協に声をかけて、漁協で船を出してもらって、そこで初めは水を取って。厚生労働省も呼んだんです。そんな放射性物質を含んでいる水のところに行ったら健康によくないとかいう話まであって、それで基準を作れとか

【取扱い厳重注意】

何とかと言っただけけれども、基準を作っている時間はないのでとにかく測ってくれと言って、水だけ取って測り出したんですよね。それで海域のモニタリングの強化というのを打ち出して、まず水を測るようにしたんです。

しばらくして魚もちょっと測りましたけれども、そういう経緯ですね。

○質問者 もう一件、モニタリングに関してですけれども、7月4日にモニタリング調整会議というのが開催されているのですけれども、これも大臣の御意向でということですか。

○細野大臣 そうですね。もうその頃には大分できるようになっていたのですけれども、文科省も徐々に、やはり4月頃からはよくなってきていて、それで実は6月22日に一回やっているんですよ、準備会合を。これが本当はもうスタートなんです。

何を考えたかという、もう全部私がやるのも手いっぱいになっていたもので、文科省にやらせようと思って。文科省が仕切れるようになったかなと思ったんです。そのときまでは、ちょっと目を離すとすぐ止めそうな雰囲気があったから、ずっとやっているかやっているかと言って、毎日会見をやっていましたから、毎日モニタリング結果を私も見て、ちゃんと測っているという確認をしていたんですけれども、この頃は文科省もやれるようになっていたので。当時政務官が林久美子さんという、あれは私の高校の1つ後輩で割と指示をしやすかったので、補佐官と政務官というのは本当はそういう上下関係はないのですけれども、林さんにちょっとやってくれ、任せるからやってくれと言ったら、分かりました、やりますと言うので、それで彼女に任せられると思ってこれを立ち上げたんです。

○質問者 それでは、総理から指示があったとかそういうものではないと。

○細野大臣 総理には決裁はしてもらっていると思いますけれども、私の発案でこれは作ったんです。

○質問者 もう一点、私からの最後なのですけれども、ちょっと先ほど出ました小佐古参与の活動で、プラント周りのことを小佐古参与から大臣の方にお話が行って、そこで。

○細野大臣 これは、多分私がいろいろ判断した中で一番失敗だと思いますね。本当に福島の皆さんに申し訳なかったし、菅政権でも申し訳ないなと思っているのですけれども、ちょっと経緯があって、空本さんが東芝出身で原子力の専門なんですね。平さんと空本さんは2人とも原子力の専門家で、この2人を使えということをみんながわんさか言ってきたんですよ。2人もやる気になっていたもので、ちょっと総理にも相談したらそういう議員で専門家は使えということだったので、では時々呼んで話をしようと言ってやり始めたんですよ、3月の初めの頃に。

そうしたらすぐに空本さんが、小佐古先生は自分の師匠だからこの人を使ってくれと言ってきたんです。一番初めに出てきた東芝の■■■さんは空本さんの元上司で、空本さんのことを私は余り知らなかったから、■■■さんに空本さんはどうですかと聞いたら、■■■さんは一番初めからいたから、■■■さんは、あの人はいいから是非むしろ使ってくれと言うので、■■■さんが言う空本さん、空本さんが言う小佐古さんならいいなと思ったんですよ。総理は当時、参与をいっぱい集めていたので、いろんな意見を持ってこいみたいなことを

【取扱い厳重注意】

言うから、誰かいないかみたいなのもあつたので、この小佐古さんと田坂さん、田坂さんはもともとダボス会議のときの菅総理のブレインだったので顔もつながっていたし、私も親しくなっていたので、この2人をブレインにしますかと言ったら、参与にしようということで即日参与にしたんです。それが一番初めの経緯です。

ただ、もう個人的にお話してという余裕がなかったので、当時スタートしていた会議があるのですけれども、私が、これも率直に言うとな班目さんが頼りにならないと思った後、原子力の安全の問題で一番頼りにしたのは近藤委員長なんです。先ほどのシミュレーションも作った。この人は人間としても信用できるし、判断能力も非常にある人だったので、近藤委員長のところで、週3日かかもしれませんが、毎日朝8時から朝ごはんを食べながら80分から1時間くらい打ち合わせするという会議をやっていたんです。これは、近藤さん、尾本さん、田坂さん、それで小佐古さんと呼んで、あと保安院の根井さんと呼んで、それで馬淵補佐官、長島さんがいろいろサポートしてくれて、その長島さん、私でやっていたんです。そこでいろんな技術的なことを腹合わせをして、東電に対するセカンドオピニオンにもなったので、それを持っていくというのを、一つの会議体を立ち上げていたんです。

ところが、ちょっと小佐古さんというのは個性的な人で、多分非常に能力のある人なんですけれども、なかなか根井さんと合わなかったりとか、自分の言ったことが取り入れられないことをすごく不満に思っておられたりとか、私のところにはいろいろこれは調べた方がいいとかということを書いてくれて、それは私も生かしていたのですけれども、一方で、SPEEDIの話とかスクリーニングの話とかをされるのですけれども、私はそちらを担当していないのでそれは福山さんに言ってくれと言って、福山さんとも時々やってもらっていたのですけれども、これもなかなか上手く行かなくて、福山さんも忙しかったから、多分福山さんにも気の毒だったし、小佐古先生にも、結局自分の専門家としての知識を生かせないということでフラストレーションが溜まっていたという意味では、申し訳なかったような状況に途中からなってしまったんです。

それで、気が付いたときにはもう爆発していて、今から記者会見しますみたいなことになってあんなってしまった。

○質問者 分かりました。そういうアドバイスのものを直接、間接に補佐官のところに言っていた。

○細野大臣 そうですね。幾つか有益なアドバイスもあって、ちょっと変な話なのですが、海洋放出は小佐古さんのアイデアなんです。濃い水が漏れているのだから、そこから薄い水を出して濃い水をそちらに移したら圧力が下がって、それで出なくていいからそれでやったらどうだというアドバイスは小佐古さんのアドバイスなんです。紙も残っているのですけれども。

他にも幾つか、いろいろ食べ物の基準とかスクリーニングとかで、いっぱい彼は提出しているアドバイス資料みたいなものを全部公開していますけれども、その中に入っていないけれどもね。

【取扱い厳重注意】

○質問者 分かりました。

○質問者 最後にポイントだけにします。5番目の件で、250ミリシーベルトに引き上げられた経緯なのですが、これはそもそも、東電側からの要請があったと聞いているのですけれども。

○細野大臣 こちらは、私は全く知らないんですよ。

○質問者 そうですか。分かりました。

そうしますと、500ミリシーベルトの話がそもそも出て、結局ぼしやってしまったようですが、いつ、誰からこの話が出ていて、なぜぼしやったのかという点について。

○細野大臣 これは、完全に私の発案です。今から言うと本当に非常識なことを言ったと思われるかもしれないのですけれども、ちょっと伏線がありまして、16日の夕方、自衛隊が4号機のプールへの注水に失敗しているんですね。その前後からプールの燃料が危ないということになって、

ちよっと切ってもらえますか。

<録音停止 02:07:50>

この16日のものを空振りして、何故空振りしたかという、放射線量が高いと言って空振りしたんですよ。17日の朝、16日に頼みこんで自衛隊と警察と消防に、それぞれ大臣に電話して頼み込んで、17日の朝自衛隊が初めて放水に成功してくれたんです。その日の後、成功はしたのだけれども、毎回こんなことをやっていたらとても事態を収拾できないと思っただけです。ちょっとその前にあって、それで私も自衛隊に何人か制服組でものすごく親しい人間がいるので、そういう人間のアドバイスも受けたら、自衛隊は命令すれば何でもやると。だから使ってくれという話もあって、いろいろ考えたんですけども、やはり本当に自衛隊に覚悟して行ってもらうためには、この放射能の問題の恐怖を彼らに乗り越えてもらわなければならないと思っただけですよ。

それで、これも小佐古さんのアイデアかもしれない。

○岡秘書官 私はそのときいないので、それは分かりません。

○細野大臣 日本だけなんですよ、250にしているのは。各国500なんですよ。アメリカは、志願する人はリミットがないというのもあるんですよ。御存じですか。

○質問者 ICRPの基準ですよ。

○細野大臣 はい。志願兵も日本は作れないんですよ、250が上限で。私がやはりそのとき考えていたのは、本当にシビアになって放射線量が上がったら、誰もあそこに入れない、法律、このバリアがあると。しかも、今の、本当に浴びるのはわずか数ミリシーベルトだったろう環境下ですら行かずに帰ってきた我が国のこの状況で、何とかなるのだろうかともものすごく恐怖心を覚えたんですよ。

これは上限を上げるしかないと思って、それで総理に提案したんです。その日に、総務大臣と防衛庁長官と、ごめんなさい、自衛隊と総務大臣だけかな、細川厚労大臣も呼んでいたかもしれませんが、私から提案してもちよっとおかしなことになるので総理から提案

【取扱い嚴重注意】

してもらったんです。そうしたらやはり強烈な、自衛隊と警察の方からはとんでもないという話があった。反対があるのは正直言うと予想していたんですね。

それでどういう話になったかという、250まではちゃんとやると。250までやるのなら問題ないだろうということで、私もそれ以上はごり押ししなかったんです。

○質問者 閣議と言うか、閣僚が集まった場においてその話が出たということですか。それとも、集めたメンバーだけで。

○細野大臣 そうです。集めたんです。これは長島さんに手伝わってもらったんです。私も手がなかったので長島さんに手伝わってもらって。

○質問者 厚労省と経産省と人事院に行かれたということなのですか。

○細野大臣 そうです。江利川さんに17日に会ったんですね。ごめんなさい、これは、江利川総裁が来て小宮山厚労大臣が来て、このとき中野さんもいたな。ちょっと定かではない。

もう一つ実は違うものやっけていて、その後放水ですごく混乱したんですね、自衛隊と消防と警察が。お互いに、どちらが先に行くかとか。それで、これもまずいと思ったので、自衛隊に指示権を持たせて、消防と警察をその下に付けるという指示書を総理から出してしてもらったんです。それは出たんです。内々の指示書なのですから、指示という形にはなりませんでしたが、そのときとちょっと混同しているかもしれません。

それくらい、この数日の自衛隊と消防と警察が、みんな本当に恐れながら、恐ろしいですよ、当然。恐ろしいながらも何とかしなければならぬという精神的なトラウマを抱えながらやったのはきつかったんですね。これは、ほとんど表には出ていないのですけれども、炉がおかしくなった15日以降の16、17、18、19くらいまでというのは、本当にそれが大変だったんです。その中で250の話と総理の指示権で自衛隊に、そうすると有事になってしまうのですけれども、自衛隊が基本的には放水とかJヴィレッジの管理をするという話を持ち出したんです。

○質問者 次に、校庭の利用基準、これにつきましては1点だけなのですが、細野大臣が、当時この20ミリシーベルトを一つの目安にするという話になったときに、計画的避難区域の基準と同じ基準でいいのかという疑問をどなたかに話された御記憶はございますか。

○細野大臣 ここが一番辛いところなのですが、私は何度か会議に呼ばれていて、この時期4月に入ってからなのですが、誰かに言ったのではなくて会議の席で、論外だと。当時、20ミリシーベルト以上のところで学校を開いていたんです。即学校を休校にして、ゴールデンウィークまでに除染をして、やり直すべきだということを強く主張したんです。だから、みんな知っていると思います。ただ、外向きには言えないから、例えば記者会見なんかで聞かれたらメモしていることを言っていますけれども、中では強く主張していたんです。

そこでも文部科学省と激しくぶつかっていて、文部科学省で出てきたのが、旧文部省ではなくて旧科学技術庁の人間ばかり出てきて、安全だと言い張るので、しかも、郡山は土

【取扱い厳重注意】

を剥いだときにはけしからんとやったんですよ。

○質問者 文科省が。

○細野大臣 文科省が。

そこは一回決まっていたんです。私が一回会議に呼ばれなくて、20ミリでそのままやる、除染も必要なしと決めていたんですけれども、もう一回会議をやり直せと言って、もう一回集めてもらって、私は絶対反対だと。

○岡秘書官 随所でこういう話をしていたんですよ。

○細野大臣

結局文部科学省の当時の結論は、学校を休みにしたりすると PTSD になるからやらないと。剥いたら持っていくところがないからと言って、郡山のやったことに関しても非難していたんですよ。そうしていたら、小佐古さんの方からワーッと出てきて、いろんな運動が出てきて、追い込まれてしまって、結局1時間当たり1マイクロまで下げるということになってしまったんですけれども、これはものすごく不幸な結果だったですね。

○質問者 大臣が反対されていたのは、4月19日に校庭の利用基準というのを最終的に決めているようなんですけれども、それよりも前からそういう話をされていたと。

○細野大臣 そうです。

○質問者 分かりました。

○細野大臣 いや、4月19日ですか。一回決めていたんですかね。

○質問者 4月の初め頃から検討して、4月19日に決定しているんですが。

○細野大臣 ちょっとごめんなさい、確かではないです。

○質問者 結構です。

○細野大臣 ただ、結局これはずっと尾を引いていて、ゴールデンウィークの後まで尾を引きましたから、何度か復活、盛り上がりも一回議論するみたいなことがあったんです。19の後もあったかもしれません。それで、文部科学省と言いながら旧科学技術庁系とそこでまたぶつかって、政務ともいろいろやり取りをして、この辺が一番こういうピアリングの辛いところなんですけれども、私は、やはり禍根を残す可能性があるぞと、そこはかなり強く言ったんですけれどもね。

○質問者 分かりました。

次の汚染水の放出に関して、これは4月4日に放出しているのですが、4月1日の段階で大臣が海洋放出はまかりならないという発言をされたという記録があるのですが、それは間違いはないですか。

○細野大臣 はい。間違いありません。

○質問者 この発言はどういう背景でしょうか。

【取扱い厳重注意】

○細野大臣 これは、特プロで、特プロは朝 10 時頃からやっていたよね。

○岡秘書官 そうです。10 時です。

○細野大臣 10 時頃からやっていて、私はちょっとその日何かで朝遅れて出たんですけども、遅れて出たら、当時私のことをサポートしてくれていた若手の議員の中の 1 人で石井登志郎君が出ていて。

○岡秘書官 これは大臣は出ていなくて、4 日でも会議を。

○細野大臣 そこで、海洋放出の話が出ていたと聞いたので、ちょっと。

○岡秘書官 4 月 1 日の会議で補佐官が出ていらして、絶対あり得ない選択だと。だから絶対やめとけということをおっしゃっているんです。

○細野大臣 言ったんですね。そのときは、東電の安直な感覚に私はちょっとびっくりして、これだけ迷惑をかけているのに薄いからと言って出すというのは何事だというふうに言ったんです。それは、私も別に間違っていなかったと思っているのですが、事態が変わったのが、次の日かなにかに濃い水が出ているのが分かって、あの濃い水は、全然質、量ともに違う意味を持つので、これを何とか止めようと言ってやったんですけども、止まらなかったんですよ、圧力が高くて。結局 4 日くらいまで。

○質問者 6 日に止まっています。

○細野大臣 6 日までかかっているんですね。どうやって止めるかで散々議論をしたのだけれどもなかなか止まらなくて、かつ、止まったとしてもまた出るかもしれない。この濃い水をどこかへ移さない。それで、3 日の段階で私は判断を変えたんです。それは、濃い水を止めるためには、薄い水はやむを得ないと。だから出すことを検討しようというので。ですから、これは海江田大臣によく相談はしたのですが、実質的には 4 日の海洋放出の判断は私の判断です。

誤算は、リエゾンもみんないたので、外務省もいて毎日説明会をしていると聞いていたので、そこで海外には説明に行っていると思っていたんですよ。確かに、4 日にしているんですよ。しているのですが、そこに韓国とかが来ていなくて、4 日に出してしまったのが結局通報していないというので、大騒ぎになってしまったんです。これは、私がこれまでやってきた中で言うと大失敗、本当に申し訳なかったことの一つですね。

ただ、ここは申し上げたいのは、出すという判断自体はやむを得なかったと思うんですよ。本当に状況がもうあれを止めないとどうしようもないという感じでしたから、間違っていなかったと思うのですが、ただ、やはりもう少しちゃんと説明しておかなければならなかったし、あれは相当政府のやっていることに対する信頼を損ねましたよね。それが今の漁協とのいろんな問題ともつながっているの、非常に申し訳なかったなと思っています。

○質問者 あれは我々役人でちゃんと気を回さなければいけないところだったと思います。

○細野大臣 いや、それでもあそこは。そこでもう反省して、それから必ず主要国には直接、うち外務省からもその頃からはリエゾンを回してもらって、その混乱もあったので

【取扱い厳重注意】

リエゾンを出してもらって、そこから外務省を通じて全部連絡するようにはしたんですけども、そのときはまだそういう体制にはなっていなかったんですよ。

○質問者 分かりました。それから次に行ってよろしいでしょうか。

○細野大臣 はい。

○質問者 先ほどもちょっと簡単に御説明いただいたので、補助的にですが、8番ですが、炉心溶融の関係で、炉心が溶融している可能性があるということの中村審議官が記者発表された3月12日の午後ですが、その後、それについて具体的に官邸の中でどのようなコメントが誰からあったのかということは御存じですか。

○細野大臣 3月12日の経緯は、私はよく知らないのですけれども、その後4月頭あたりなのですけれども、炉心損傷とかいう言葉を一回使っているはずなんですよ。残っていますか。

○質問者 燃料ペレットの溶融。

○細野大臣 燃料ペレットの溶融という言葉も一回使っているのですけれども、炉心損傷は。

○質問者 炉心損傷という言葉は、東電が早いうちから使っています。

○細野大臣 使っていますよね。その言葉にしようという打ち合わせは一回、班目委員長なんかとした覚えはあります。それは、本当にどういう表現がいいのかというのは分からなかったもので、溶けていることは間違いないけれども、溶融の程度は分からないと。しかし、燃料損傷とかいうレベルではなかつたら。炉心というのはかなり中心が溶けているということですから、そういう表現にしようというふうに班目委員長なんかと話した覚えはありますね。

それで、記者会見でその言葉を使っていると思います。私は、途中から。それはやはり私のいろんな判断の中で言うと、まずかったと思います。

正直分からないのですけれども、やはり希望的な観測に基づいてどういう表現が一番適切かという部分での議論になっていたと思うんですよ。ですから、メルトダウンという言葉自体は定義が非常に不明確な言葉なので余り使わない方がいいと思うのですけれども、やはり炉心溶融の可能性ありということは早い時期に認めるべきだったと思います。

○質問者 4月12日の中村審議官の記者発表を受けて、その後、保安院が記者発表するときには官邸の了解を得てから発表するということになっているのですが、あれほどあなたがそういうふうにすることにしたというか、要求したのか、そこら辺のいきさつというのは御存じでしょうか。

○細野大臣 いや、全く分からないですね。3月12日の何時頃ですか。

○質問者 12日の14時の記者会見の後です。

○細野大臣 その頃は、私は下にいたか、もしくは、この頃というのはそれこそベントができたかできないかとかとすったもんだをやっているときですから、まだ私、水素爆発していないので、地下にいるんですよ。記者会見を見ていないですから、そこは私は多分

【取扱い厳重注意】

いなかったんだと思います。

○質問者 最後ですが、先ほど来出ています日米協議、先ほどのお話ですと、大臣は3月18日にルース大使に会われて、その後日米協議に関しては政務の方の窓口的な役割とか代表的な役割をされているようなのですけれども、これ以降、細野大臣がそういう役割をするということになったのはどなたが、総理から何か。

○細野大臣 総理からです。総理に私が言ったんです、やらせてくれと。

○質問者 そういうことですか。

○細野大臣 はい。

○質問者 分かりました。

○細野大臣 ちょっとあれなんですけれども、総理に言ってもらっているのですけれども、ほとんど自分で言っています。

○質問者 分かりました。

そうすると、それ以前に北澤大臣とが、松本大臣ですか、いろいろ動かれていて、それで何かお二人が動かれていた代わりに今度、細野大臣がやられることになった、そのきっかけと言いますか、理由と言いますか。

○細野大臣

一番難しかったのは、やはり防衛省なのですけれども、防衛省に言ったのは、ミリミリの話はそちらでやってくれと。シーバーフとか来たんですけれども、そういう話にはタッチしないと。その代りそれ以外の、例えば医療の問題とか物の問題とか、そういったことも防衛省が調整していたのですけれども、それはこちらでやった方がいいからやらせてくれと言ったんです。

外務省は、松本外務大臣が私とたまたま同期当選なので非常に仲よくて、私にとっていい兄貴分なのですけれども、彼が、それはありがたかったのですけれども、全部おまえに任せるからと言って局長以下全部スタッフを付けてくれたんですよね。その会議に関しては、それで任せてくれて。

○質問者 その米側からの話を最初に受けられたのは、どなたなんでしょうか。

○細野大臣 長島さんですね。

○質問者 分かりました。

それから、支援物資受け入れの調整の関係なのですが、米側からの支援物資の受け入れについては大臣がいろいろ差配されたようですが、アメリカ以外からの受け入れについては。

○細野大臣 アメリカ以外からは、私が若干でも窓口をやったのは、フランス、ロシア。イギリスは直接的には、技術的ないろんなアドバイスなんかはありましたけれども物は余

【取扱い厳重注意】

りやっていないです。それくらいかな。

○岡秘書官 記憶ないですね。

○細野大臣 ロシアは、ロサトムとか、クルチャトフ研究所とか今も付き合っていますけれども、フランスはアレバとか。大統領も来ましたからね、フランスは。

あと、防護服とかは個別にありましたけれども、それは外務省が窓口をやってくれて、こちらへ来て少し配ったりとかというくらいです。

○質問者 そういう差配は、日米協議の前の関係省庁の打ち合わせの中で一緒にやっていたのでしょうか。

○細野大臣 そうですね。必要に応じてやっていた。あとは、そのロシアとかの話は、もう誰かに振っていたりはしたんです。例えば経産省の審議官にロシアのことはやってもらうとか、フランスは外務省のこの人とか、そういう感じでやっていてそことやり取りをして、全部会議体をやるのはもう無理だったので、共有する必要があるときは日米会議の前に日本側だけ会議をやって、日本側のところでささっと共有してそれで済ましていました。

○質問者 分かりました。

○岡秘書官 当時、関係省庁会議みたいなものがなかったので、日米協議の前の会というのが事実上の関係省庁会議になっていて、それが機能していたと。

○質問者 分かりました。

○質問者 本当に長い間ありがとうございました。